

令和元年十二月一日発行 第二十九巻第二号  
平成三十二年九月十八日第三種郵便物認可  
通巻四三回二号（毎月一回一日発行）

# 槐 かい

岡井省二創刊

令和元年12月号



# ちんちろりん

高橋将夫

古典からそよいできたる秋の風  
鳥渡る過疎の村にも立ち寄りて  
毬栗の中の三つ子や子守唄  
秋天は釣天井かもしれぬ

虫の音に包囲されたるテロリスト  
色鳥や結びつかない顔と声

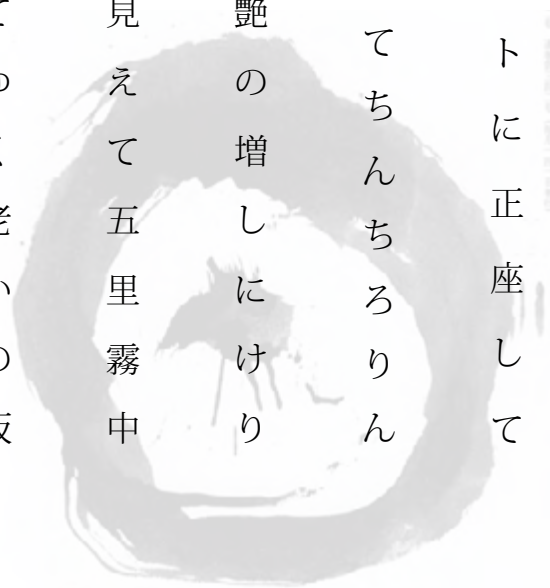
秋風鈴母はベットに正座して

目で笑ひ鼻で笑つてちんちろりん

柿の渋抜けければ艶の増しにけり

足元はしつかり見えて五里霧中

団栗がころがつてゆく老いの坂



# 槐安集

加藤みき

日の出なり芋の葉の露集合す  
まだかまだかと待ちて忽ち暮の秋  
お初穂を供へ鎮守の朴のこゑ  
日も月も出で入るときの巨大なり  
笑ひごゑ人の集まり紅葉散る

中島陽華

やつとこさ茅の輪くぐりぬ杖二本  
海老蔵と南国白熊アイスカな  
夏簍れハリセンひとつちようだいか  
夏逝くや桧垣を過ぎる鳥の影  
晩涼や食うてもみたき鹿の糞

竹内悦子

臍の緒の筥に水晶秋刀魚食ぶ  
花びらの髪もつれをる烏瓜  
秋の雲犀も鯨も狸々も  
重陽や父の七十八回忌  
夜遊びの月を背にして帰りけり

雨村敏子

長月や孔雀の羽を葉とす  
田の神と風神遊ぶ踊りかな  
無花果が笑ひころげし百万遍  
緋縮緬解いてゐたり後の月  
十六夜やパン生地静かに醗酵す



本多俊子

夏鯉の重心背ナにひとゆらぎ  
草原に置き忘れたり幻想  
爽やかや夢持つかぎり人老いず  
星好む虫好きもゐる夏休み  
枯れきつてこそ麗しき蓮の骨

近藤喜子

秋気澄む光と水のそのやうに  
濡れし手に集まつてくる秋の風  
秋冷の森に育ちし心柱  
建具なら開けるものを霧襖  
明月であれ人の世に生くるこころ

瀬川公馨

肉声は御法度木上椋むく鳥のこゑ  
厩戸皇子の吹かせる秋の風  
ペパーミントの夏の海原さようなら  
トルコ赤の旋回舞禱秋はじめ  
生き生きて秋を見たまえ山の人

柳川晋

何もせぬ親でありけり秋灯  
涼風や街は海より浮上せり  
飛ぶ前の苦労は見せぬ流れ星  
白帝の白の秘密を自白せり  
クラインの壺に湧き出す秋の水

熊川 暁子

石庭の地から空から秋のこゑ  
あひまひな記憶のままに今日の月  
立ち話聞いて弾けし鳳仙花  
雁来紅かがやくものを携へて  
白萩の咲き初む神に近きより

江島 照美

人生の間に間に來たる色鳥よ  
落ちさうで落ちぬ心や芋の露  
剥けるまでそつとしておく夜の桃  
今日の月心の窓で色変はる  
赤とんぼ赤に寂しさありにけり

寺田 すぐ江

白雲の遊んでゐたり真葛原  
天空に近道はなし雁渡し  
露草や空の青さに染まりけり  
厄日かな房総の海吼ゆる闇  
酔芙蓉ひとの匂ひの風が来る

岩下 芳子

神の旅ルートいろいろありにけり  
パラパラと落ちて來さうな鱗雲  
氣を送る人受くる人星月夜  
ビル街やバケツの稲の稔りたる  
白雲を疎らに置いて秋の空

有松洋子

空欄の明日に爽涼満ちてをり  
良夜かな過去のすべてを肯うて  
徒競走どの子の背にも風爽か  
瞑りをればいつも秋景ふるさとは  
雲上は行かず神の旅は人見つつ

岩月優美子

いさかひの無き世を願ふ秋桜  
葡萄棚の下の木洩日甘かりし  
とりどりの虫の音野外コンサート  
断捨離へまだまだ遠し竹の春  
情念の炎となりて曼珠沙華

近藤紀子

初秋や賜はりし風抱きしむる  
タピオカを口もとせずしく生身魂  
蟬ぴたと鳴き止む刻の潔し  
簾仕舞ふたちまち空の近うなり  
晩節の良夜の聲に耳澄ます

竹中一花

七支刀神鶏草の露を食む  
念珠抱き残暑の夜に入りけり  
萱の穂の径や若狭の一の宮  
鳩笛の音は遠くへ時つ風  
雨晴あばらせの峠千草のただゆるる

前田美恵子

秋暑し遺品の量を目交に  
指先に残る菊の香草書体  
昨日より今日の元氣や零余子飯  
蛇穴に入り鬼子母神目覚めをる  
先頭の一羽なりけり稲雀

中田禎子

闇に現れ音霊のこし風の盆  
ひと粒のブリリアンカット柘榴裂く  
ひんがしに向かふ道あり大花野  
大輪の菊持て余す花占ひ  
布袋さんと卒塔婆小町と笑茸

吉田順子

余生なほ背筋伸して白桔梗  
秋高し護摩木に齡記しけり  
秋夕焼野鳥の森のふくれ来る  
木犀や闇をとび交ふ花の精  
銀漢や取り舵いつばい出航す





# 槐市集

久保夢女

遠花火眼と眼で交はず記憶あり  
旋回は別れのしるし燕去ぬ  
つんつんと槍鶏頭の天下なり  
小石積み秋風の浜あとにする  
揃ひたる顔ほころびて今年米

阪倉孝子

人の世に楽しき命鱈鰯ねる  
語りたくふれ会ひたくて秋桜  
追伸の一言跳ねる鰯雲  
吉祥天色無き風に舞ひ来たる  
街頭の雨に灯さる鶏頭花

柴田靖子

思ひふくらむ朝日さす稲の花  
ほてりある秋茄子に触る命かな  
はかなげで強し秋桜のやうに  
蓮の実の飛びゆく未来はてもなく  
ちちろ虫とつと静寂に声をあぐ

庄司久美子

石段の途中の箒樁の実  
萱屋根の村の水車や秋櫻  
養生中の芝伸びし鳥威  
不開の門の湿る土秋晴るる  
ピカピカの瓢のくびれナポリタン



杉原ツタ子

人形のべべは赤色棗の実  
長月や朝一杯の珈琲から  
控え目の桃色今朝の秋海棠  
知恵もろて何処かへ忘れ昼寢覚  
朝顔の目印もあり投票所

高野昌代

沙魚なるや考との釣りの茨木川  
台風一過大輪に咲かす傘の波  
秋日中ただいまと差し出す御座候  
下手物と言はず無辺なる山椒魚  
一途なる理系の進路に薄紅葉

竹村 淳

高校野球  
勝ち続け最後に一敗夏終る  
神輿担ぐ懐しき顔皆老ひて  
かき氷昭和レトロの十三よ  
羅に艶めく女将貴船床  
柿の実の色づき初むる晩夏かな

田中信行

地酒酌み塩で頂く走り蕎麦  
自分史の夏のニコマ幻灯機  
シューベルトの眼鏡の展示秋に入る  
旅愁とは秋茜舞ふ詩仙堂  
星月夜明日日には明日の風が吹く

田中美恵子

宿坊の朝の早しやトロロ汁  
集まりて神に手向けし今年酒  
本堂の読経身に沁む杉木立  
万葉の道を歩くや藤袴  
秋祭屋号で呼び合ふ旦那衆

時 澤 藍

気まぐれに振り回さるる秋の空  
秋空や白か黒かは決めません  
名月を見上げこころのマッサージ  
秋彼岸ゆつくり撫でる生命線  
名月を見上げてしばし仏顔

# 槐集

## 高橋将夫選

零点到満点を知る 桐一葉 大阪 平野 多聞

このまんま消えたき日あり晩夏光  
飛びにけり明日を知りたく蓮の実が  
不知火や星の数ほどある生死  
上る鮭鱗に透けし妊と忍  
若葉して新たな血潮よみがへり  
仏頭の眼さやかに見晴るかす  
決断の時を告げをり桐一葉  
骨肉を争ふドラマ石榴割る  
倒れてもなほ顔上げり秋桜  
誘はれて飛ぶほかはなし草の絮  
幸運や吾がみほとりに秋の蝶  
芒原鬼女も菩薩も一呼吸  
芭蕉葉やもとより風は気まぐれに  
拳骨を呉れたき人よ青レモン

竹原 久保 夢女

藤田美耶子

名も知らぬ鳥鳴く千子と秋きたる 岡崎 柴田 靖子

秋天やカラカラと声のぼりゆく  
明日へと草木を誘ふ秋の風  
鳩笛や帰心一途となりにける  
月に住むそんな日来るやいとほしき  
万物はみな緑から新松子  
生駒山並くつきり晴れし稲の花  
灰汁強し女のならひ芋茎むく  
生きぬきし色にありけり種茄子  
絶景の巨岩も恐し厄日かな  
満潮の瞬間の黙秋の海  
病葉のなかなか散らぬ朝の杜  
空蟬に命吹き込む日の光  
一斉に息吹き返す秋の山  
秋日照る地から一番近い生

守口 中西 厚子

枚方 中 貞子

# 銀河往来

## ◆ 槐集観照

このまんま消えたき日あり晩夏光 平野 多聞

例えば、恥ずかしくて「消え入りたい」という思いをした経験は誰にもあるだろう。しかし、掲句の場合は心が満たされ、このまま晩夏光の中で彼の世へ行くのも有りかというような思いではないだろうか。

〈零点に満点を知る桐一葉〉の句、苦勞した分やさしくなれるといったところか。

〈飛びにけり明日を知りたく蓮の実が〉の句、明日を知りたくて飛ぶ蓮の実の未来志向に共感。

〈不知火や星の数ほどある生死〉の句、たしかに生死は星の数ほどある。しかし、自分にとつて生死は一度つきりで、死はこの世がなくなることを意味する。

〈上る鮭鱗に透けし妊と忍〉の句、ぼろぼろの鮭の姿に産みの苦しみと忍耐を見る。

決断の時を告げをり桐一葉 藤田美耶子

あまたの桐の葉に先駆けて散る一枚の桐の葉に、今がその時という一つの決断を見た。

〈若葉して新たな血潮よみがへり〉とへ倒れてもなほ顔上げり秋桜〉は命の賛歌。

芒原 鬼女も 菩薩も 一呼吸 久保 夢女

芒原は菩薩が一服するところと言われて納得。鬼女が一服するところと言われて納得。芒原は不思議なところだ。

〈誘はれて飛ぶほかはなし草の絮〉の句・草の絮だけでなく、

私にもそんなことがあったような気がする。

〈芭蕉葉やもとより風は気まぐれに〉の句、風の気まぐれを俳聖芭蕉はむしろ楽しんでいたのかもしれないと思う。

明日へと草木を誘ふ秋の風 柴田 靖子

秋風にはどこか淋しさがあるが、「明日へと誘う」に明るさと元気を見る。

〈名も知らぬ鳥鳴くチチと秋きたる〉と〈秋天やカラカラと声のぼりゆく〉の句、オノマトペの「チチ」と「カラカラ」が成功している。

生きぬきし色にありけり種茄子 中 貞子

種茄子は生き抜いたその元気な色でDNAを次の世代に引き継ぐのだ。〈万物はみな緑から新松子〉の句にも通じるものがある。

〈灰汁強し女のならひ芋茎むく〉の句、灰汁の強い女がずいきの灰汁を抜くとはなんともしニカル。男ならつい肥後ずいきを連想してしまいそう。

満潮の瞬間の黙秋の海 中西 厚子

「風の前の静けさ」のように、満潮時にも絶頂に達した静寂があるという。そして、潮はゆつくり引いてゆくが、そこにあるのは虚しさではなく、満たされた思いか。

〈空蟬に命吹き込む日の光〉の句、日の光の中で空蟬が蘇りそう。〈病葉のなかなか散らぬ朝の杜〉もまた命を詠む一句。病葉が散らずにいるのも神さまのおかげなのだろう。

〈以下略〉